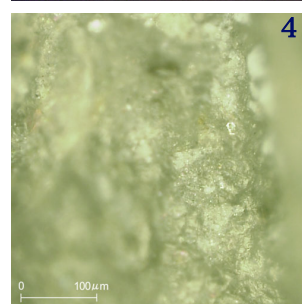
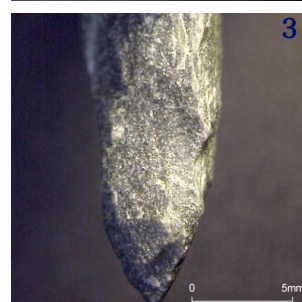
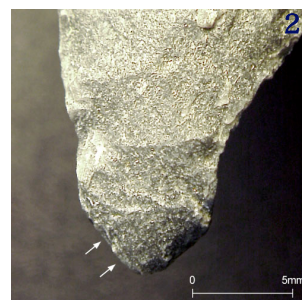
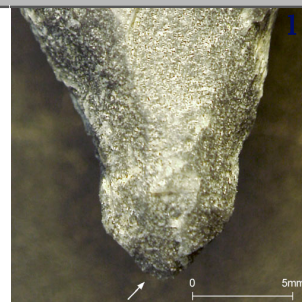
95-136
(131)

s=1/1

 使用痕光沢の範囲

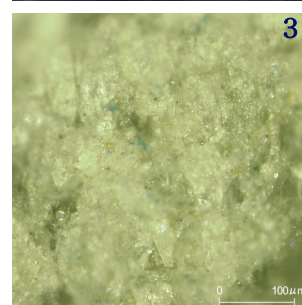
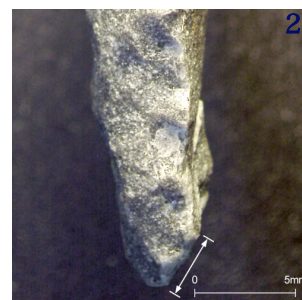
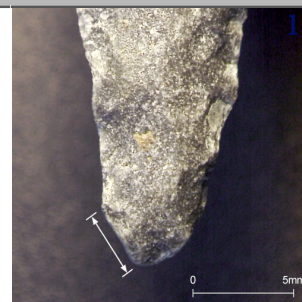
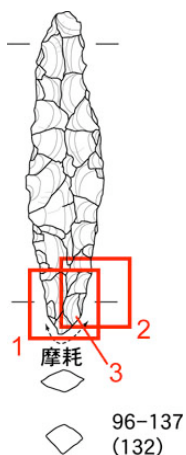
【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 矢印は錐部先端から入る微細剥離。先端に回転によるトルクがかかって生じた剥離。
- 2 先端裏面の微細剥離（矢印）。回転による剥離と思われる。
- 3 右側辺の錐部の様子。先端部の稜線にわずかな潰れが観察できる。他は加工による剥離。
- 4 使用痕光沢なし。

【総合所見】

石錐で、錐部先端に回転による微細剥離と潰れが観察される。微細剥離は回転によるトルクが石器先端部にかかったことによるもので、写真1のような典型的なねじれた剥離面が生じている。刃部側辺部には、使用による摩耗がみられるが、使用痕光沢は観察されない。



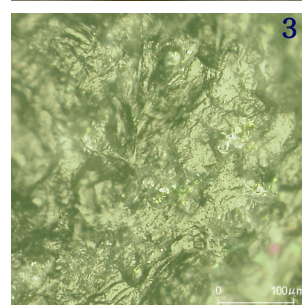
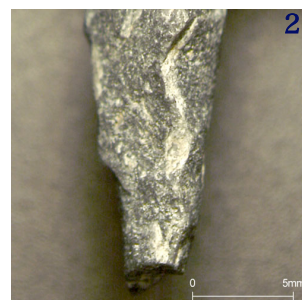
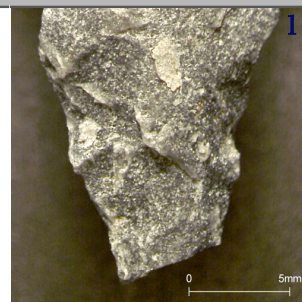
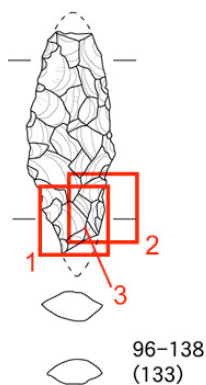
s=1/1

 使用痕光沢の範囲**【使用痕の特徴】** * 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 正面の様子。矢印間は側辺稜線の摩耗の範囲。摩耗は正面側の稜線にも及んでいる。回転による摩耗である。
- 2 右側辺の摩耗状況。矢印間の摩耗の程度が激しく、一部正面側にも及んでいる。回転による摩耗である。
- 3 使用痕光沢なし。
- 4

【総合所見】

錐部先端部の稜線が激しく摩耗している。摩耗は全ての稜線に認められる。このような様相は、錐部が回転し、石器の突起した部分、すなわち稜線部分が対象物を削り取って行くことで生じるものである。使用痕光沢は、観察されない。



s=1/1

 使用痕光沢の範囲

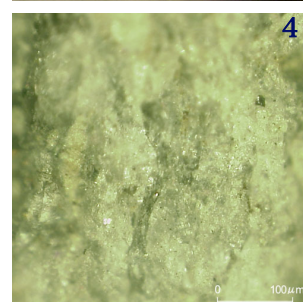
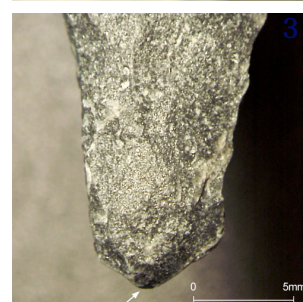
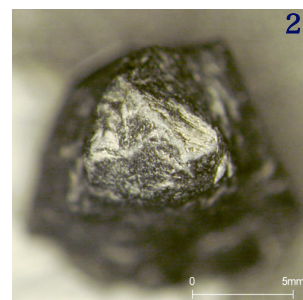
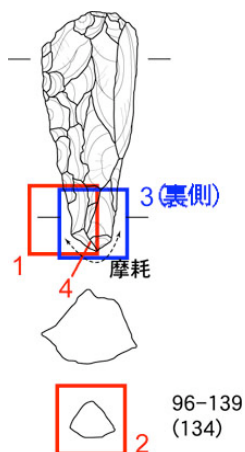
【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 正面の様子。使用による微細剥離は観察されない。
- 2 右側辺の様子。側辺の稜線上には摩耗や微細剥離は観察されない。
- 3 使用痕光沢なし。
- 4

【総合所見】

先端部分が欠損した石錐で、残存部位には使用痕は認められない。錐部の欠損はあらかじめ生じていたひびを起点にしている。事故剥離であるが、使用による破損であるかは不明である。使用痕光沢は、観察されない。



s=1/1

 使用痕光沢の範囲**【使用痕の特徴】** * 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 左側辺の様子。矢印部分に微細剥離が観察できる。回転によって生じたものである。
- 2 錐部を下面から見たところで、先端部を起点とした三本の稜線全てが摩耗しているのがわかる。先端部分を起点として微細剥離が生じている。回転による使用痕である。
- 3 錐部を裏面側から見たところ。矢印部分を起点とした微細剥離が観察できる。回転で生じたトルクが原因で生じた剥離である。
- 4 使用痕光沢なし。

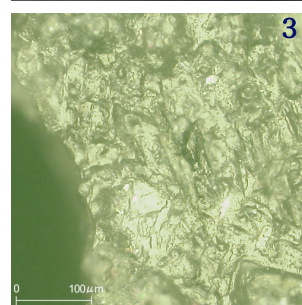
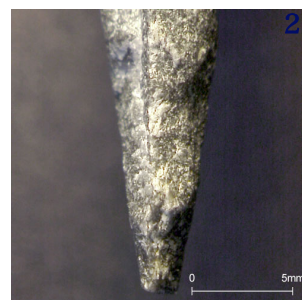
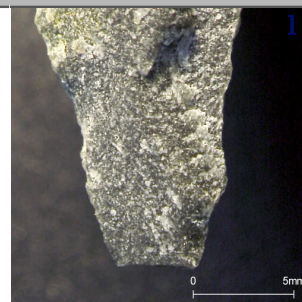
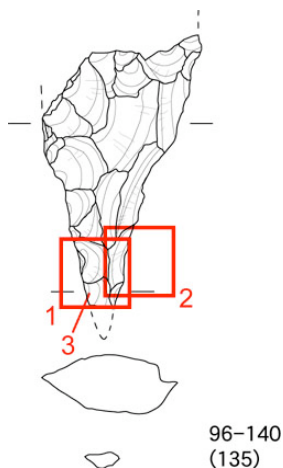
【総合所見】

錐部先端部に摩耗と微細剥離が観察できる。いずれも回転が原因となって生じたものである。使用痕の観察される範囲から、石器の先端部分のみが対象物に接触していたと考えられる。使用痕光沢は、観察されない。

石錐

96-140

安山岩



s=1/1

 使用痕光沢の範囲**【使用痕の特徴】** * 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 錐部正面の様子。微細剥離は観察されない。先端部の欠損はトルクによるものではなく、使用以外での事故の可能性が考えられる。
- 2 右側辺の様子。側辺の稜線には摩耗や微細剥離は観察されない。
- 3 使用痕光沢なし。
- 4

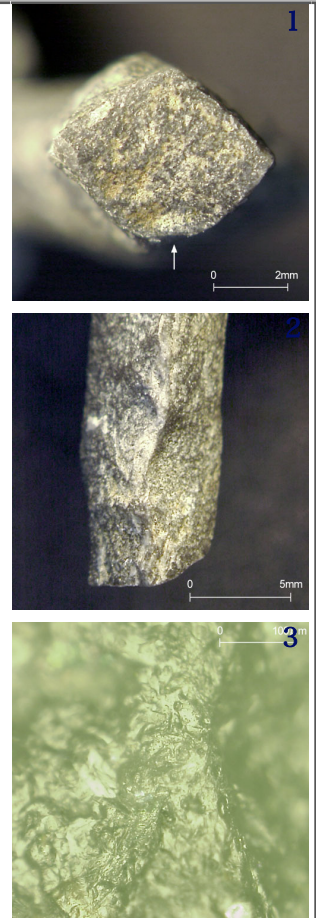
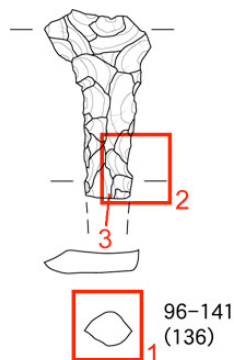
【総合所見】

先端部が欠損した石錐で、残存部位には使用痕は観察されない。錐部の折れは回転といったトルクのかかった結果生じたものではなく、使用以外の原因で生じたものである。

石錐

96-141

安山岩



s=1/1

 使用痕光沢の範囲

【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 錐部折れ面の様子。矢印を起点にした剥離面で、折れ面はややねじれている。回転が原因の破損と考えられる。
- 2 右側辺の様子。側辺の稜線上には摩耗や微細剥離は観察されない。
- 3 使用痕光沢なし。
- 4

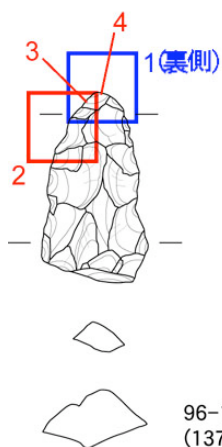
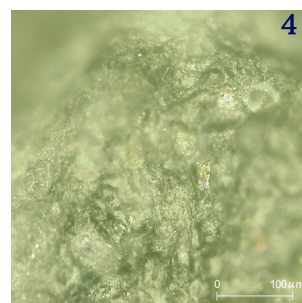
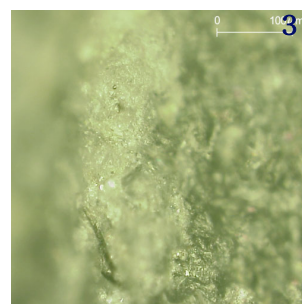
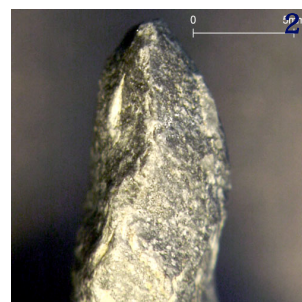
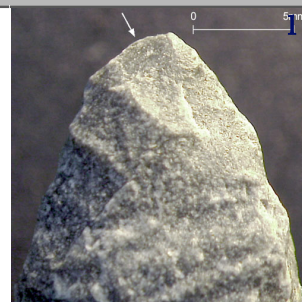
【総合所見】

錐部が欠損した石錐である。欠損はトルクのかかったねじれ折れで、使用による破損である。この破損面以外には残存部位に使用痕は観察されない。使用痕光沢は、観察されない。

石錐

96-142

安山岩

96-142
(137)

s=1/1

 使用痕光沢の範囲

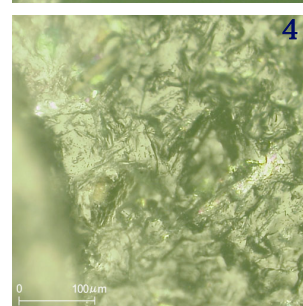
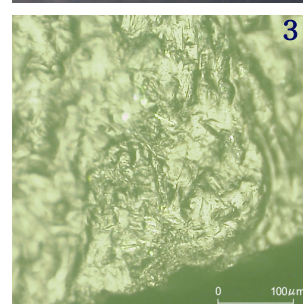
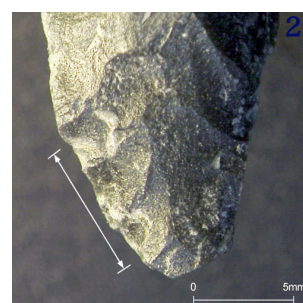
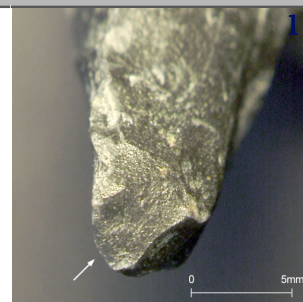
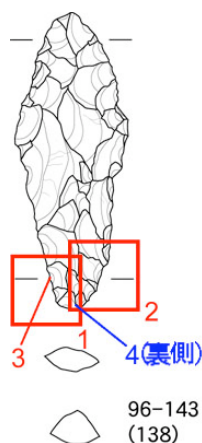
【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 矢印は打点の生じない曲げ型で始まった微細剥離である。このような微細剥離は、石器の縁辺にトルクがかかった場合に生じる。先端部は、わずかに磨耗しているが使用痕光沢は観察されない。
- 2 左側辺の様子。側辺の稜線の出っ張った部分が磨耗により丸くなっている。回転によるものと考えられる。
- 3 使用痕光沢なし。
- 4 使用痕光沢なし。

【総合所見】

先端部分には、回転によるトルクがかかったことで生じる微細剥離（写真1）や稜線の磨耗が観察される。磨耗は側辺の稜線にかすかに観察されるのみなので、使用の程度はまだ小さいと思われる。先端部は、わずかに磨耗しているが使用痕光沢は観察されない。



s=1/1

 使用痕光沢の範囲

【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 左側辺先端部分の様子。矢印は曲げ型で生じた剥離で、剥離面がややねじれている。この特徴はトルクがかかった時に生じる。加工面と使用痕の剥離面は似通っているが、加工による剥離面は打点が明瞭で、剥離面同士の切り合いの稜線が立っていることから区別できる。先端部の剥離以外に使用痕は観察されない。刃部先端部には、使用痕光沢は観察されない。
- 2 裏面の様子。矢印間は加工で、前掲の折れ面とは異なり、明瞭な打点と場ルビが観察できる。摩耗や微細剥離は観察されない。
- 3 使用痕光沢なし。
- 4 使用痕光沢なし。

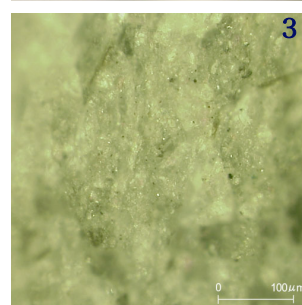
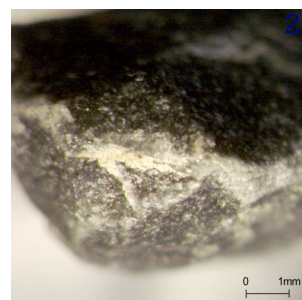
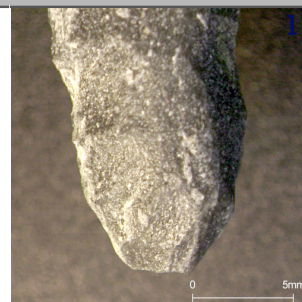
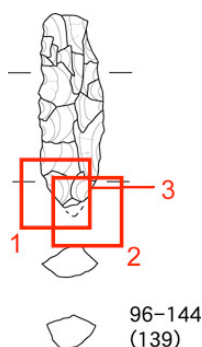
【総合所見】

先端部がねじれとられている石錐である。この剥離面は打点の生じない曲げ型の剥離で、剥離面は平らでややうねっている。加工面と使用痕の剥離面の大きさは似通っているが、加工による剥離面は打点が明瞭で、剥離面同士の切り合いの稜線が立っていることから区別できる。先端部の剥離以外に使用痕は観察されない。刃部先端部には、使用痕光沢は観察されない。

石錐

96-144

安山岩



s=1/1

 使用痕光沢の範囲

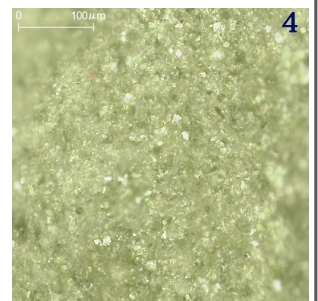
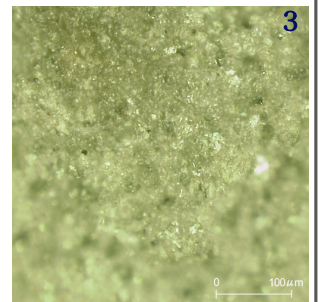
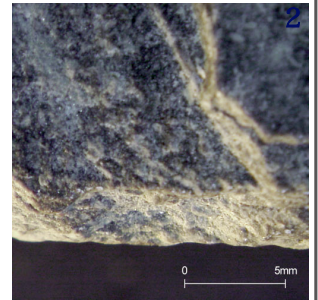
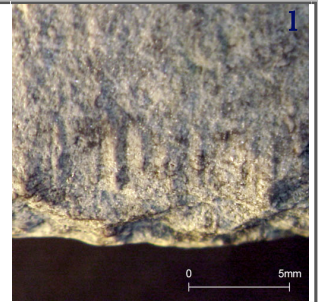
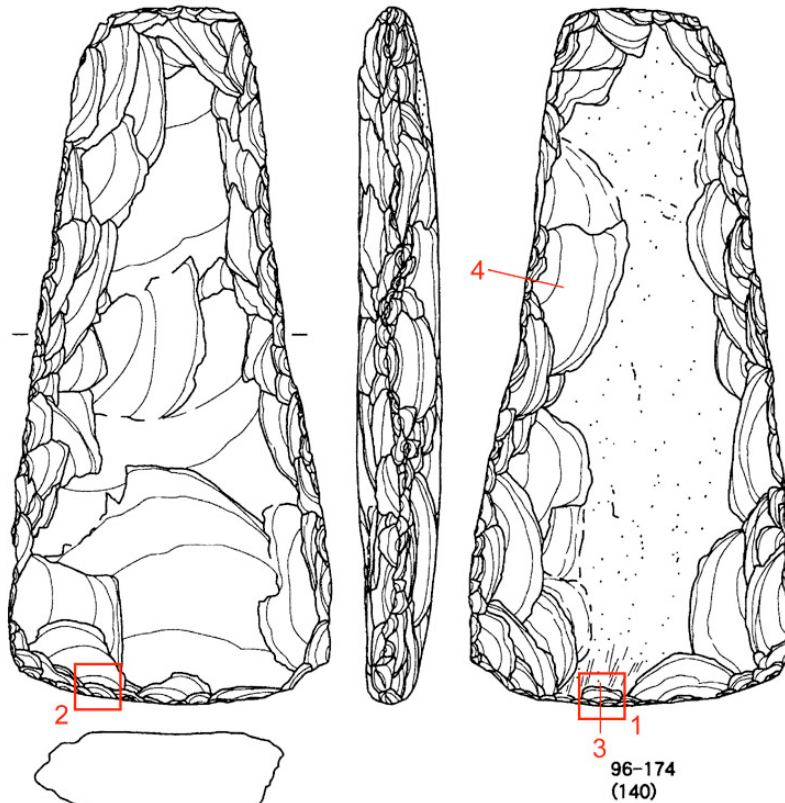
【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 左側辺の様子。側辺の稜線と正面中央を走る稜線は、共に錐部先端に近い部分に摩耗が見られる。回転による使用痕である。
- 2 錐部を下から見た様子。画面右側の稜線は激しく摩耗している。画面中央は深く抉れたような微細剥離で、ねじ切られたかのような剥離面となっており、大きなトルクがかかったことをうかがわせられる。使用痕は主に先端部分に集中しており、錐部中程には観察されない。刃部先端部は、白く摩耗しているが使用痕光沢は観察されない。
- 3 使用痕光沢なし。
- 4

【総合所見】

錐部の先端がわずかに欠損した石錐で、欠損部分の周囲が激しく摩耗している。欠損部分もねじ切られたかのような剥離面となっており、大きなトルクがかかったことをうかがわせられる。使用痕は主に先端部分に集中しており、錐部中程には観察されない。刃部先端部は、白く摩耗しているが使用痕光沢は観察されない。



s=2/3

 使用痕光沢の範囲

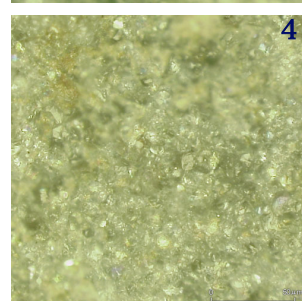
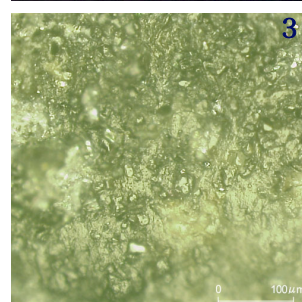
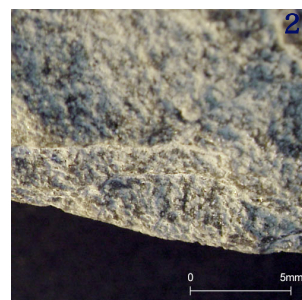
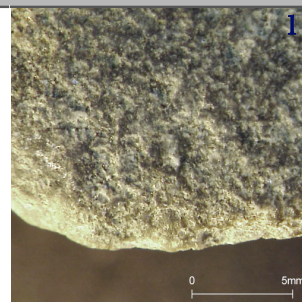
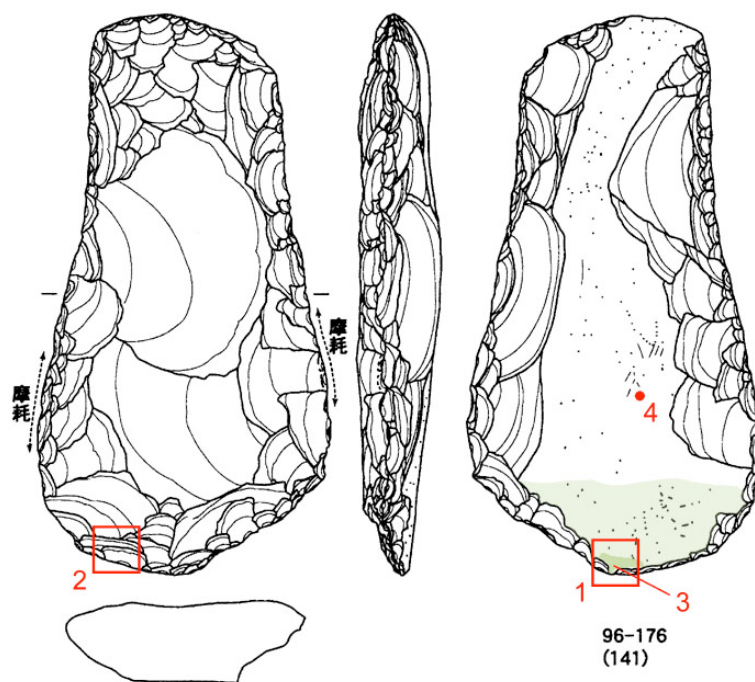
【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 裏面側の刃部の使用痕。刃部に直交する線条痕と、平らで末端が階段状になる刃こぼれが観察できる。線条痕の方向は、刃部の直交する方向と一致している。
- 2 正面側刃部の様子。末端が階段状になるものの、開始部は通常角度で生じている刃こぼれが観察できる。このように刃部が、刃部の直交する方向と一致している。
- 3 使用痕光沢なし。
- 4 使用痕光沢なし。

【総合所見】

自然面の残る裏面側には線条痕を伴う摩耗が顕著に観察される。刃部は刃潰れを起こしており、表側にその刃こぼれが目立つようである。線条痕は刃部に対して直交している。刃部の摩耗部には使用痕光沢は、観察されない。石器中央部からやや上側に着柄による摩耗が観察されるが、その部分でも使用痕光沢は観察されない。



s=2/3

使用痕光沢の範囲

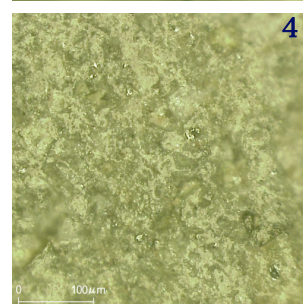
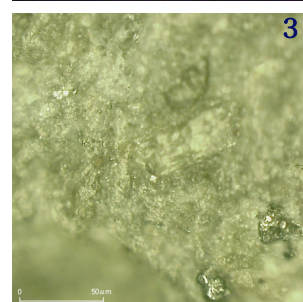
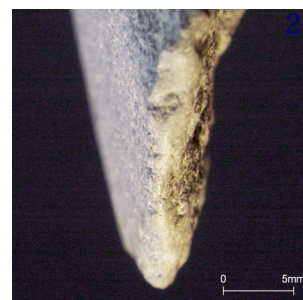
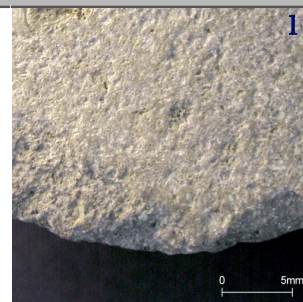
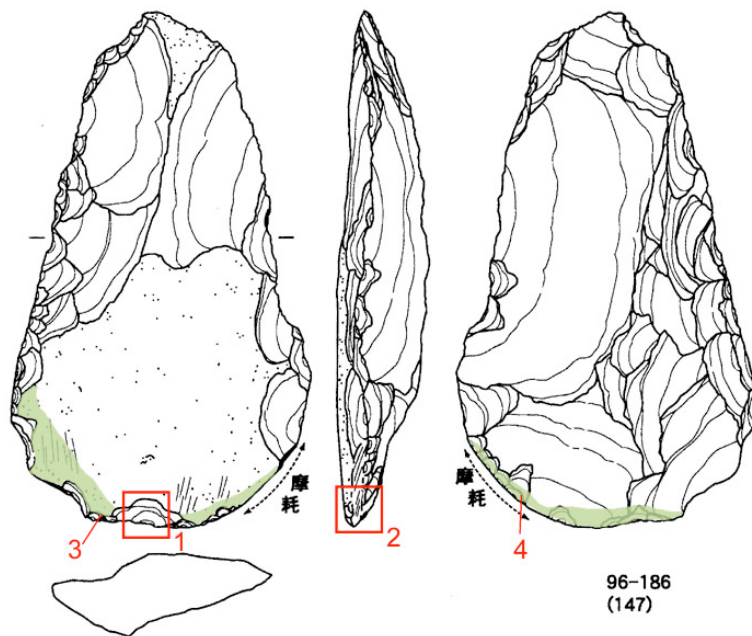
【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 裏面側の刃部の様子。刃こぼれと共に、刃部縁辺付近には摩耗が観察できる。線条痕は明瞭でない。
- 2 正面側の刃部の様子。末端が階段状となる幅広で平らな刃こぼれが観察できる。このような剥離面は、微細剥離（生じると平らな面、刃部は対象物に対して垂直に近い角度で接触することによって生じます）
- 3 Bタイプの可能性が高い光沢である。
- 4 使用痕光沢なし。

【総合所見】

自然面のある側に摩耗と刃こぼれ、反対の面に刃こぼれが観察できる。摩耗の状態から、自然面の残る面がより長い時間対象物と接触していた側とわかる。また、刃部は大きな破損が加わったために偏刃となっている。写真2の側の面に観察される破損や刃こぼれは、いずれも末端が階段状になる平らな剥離面で、刃部が対象物に対して垂直に近い角度で接触したことを物語っている。刃部の先端部にBタイプの可能性が高い使用痕光沢が観察される。風化の影響を受けている



s=2/3

使用痕光沢の範囲

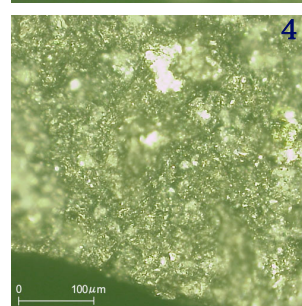
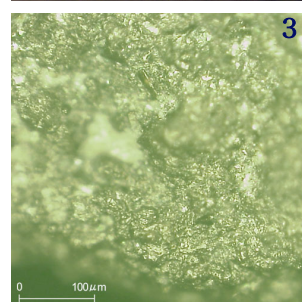
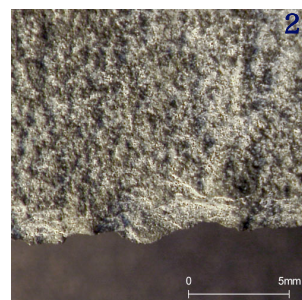
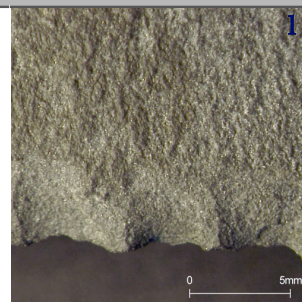
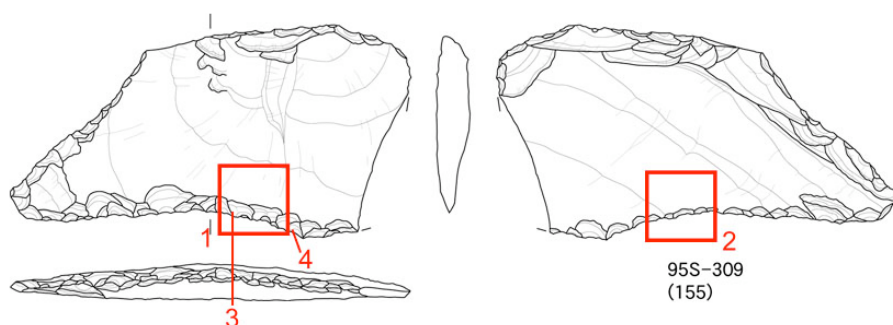
【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 正面側刃部の様子。刃こぼれと摩耗が観察できる。非常に微弱ながら画面左下から右上に向かって線条痕が見られる。刃部の磨耗部には不明光沢が観察される。
- 2 刃部右側辺の様子。刃部の稜線は激しい摩耗で丸くなっている。
- 3 不明光沢。微弱な光沢が観察される。
- 4 不明光沢。

【総合所見】

刃部の稜線が激しく摩耗しているほか、自然面の残る面の刃部縁辺にもかすかな摩耗が観察できる。自然面のある側には微弱ながら線条痕も観察できる。よって、こちらの面が対象物とより多く接触していたと思われる。



s=2/3

 使用痕光沢の範囲

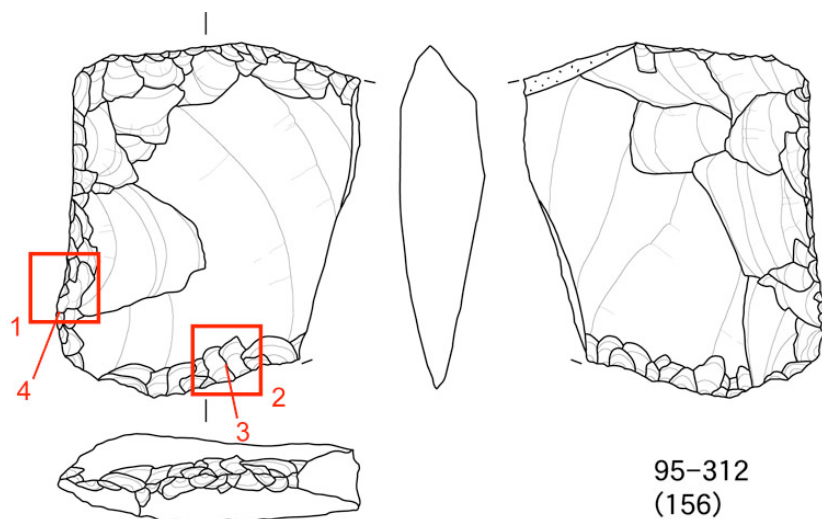
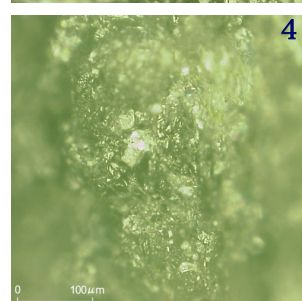
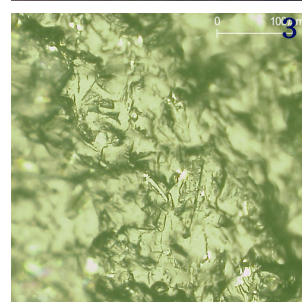
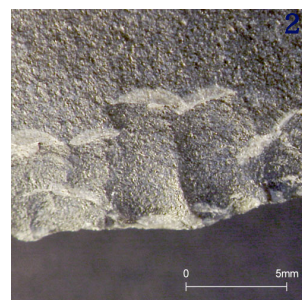
【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 正面側刃部の様子。打点間隔や平面形態が規則的な剥離面が並んでいる。やや硬めのハンマーを用いた押圧剥離
- 2 裏面刃部の様相。末端が階段状になる薄く平らな微細剥離が観察できる。このような微細剥離は刃部が前進する
- 3 使用痕光沢なし。
- 4 使用痕光沢なし。

【総合所見】

刃部の裏面に微細剥離が観察される削器である。微細剥離は末端が階段状になる薄く平らな剥離面で、対象物が刃部に垂直にぶつかった場合に生じやすい。この微細剥離の開始部を見ると、打点の径は大きく、打点を起点にした放射状のフィッシャーも観察されないことから、対象物はそれほど硬いものではなかったようである。動作としては削りが想定される。刃部に使用痕光沢は観察されない。

95-312
(156)

s=1/1

 使用痕光沢の範囲

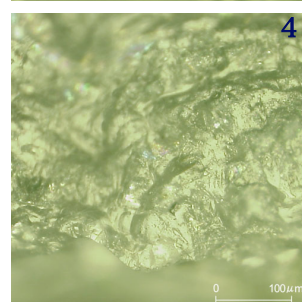
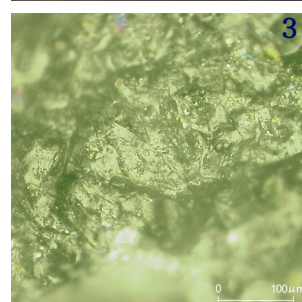
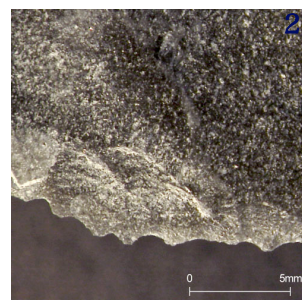
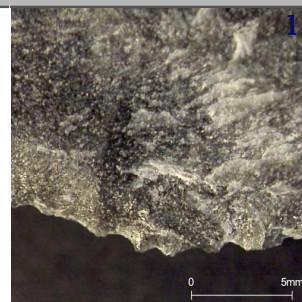
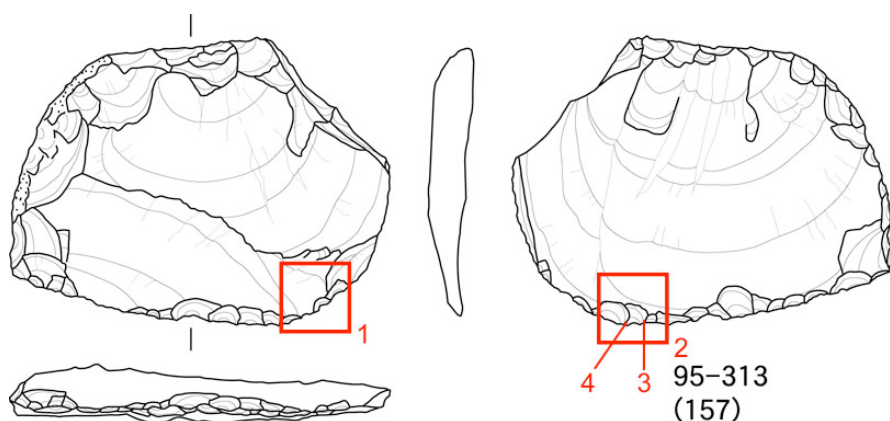
【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 左側辺下部の様子。側辺の稜線がやや摩耗している。
- 2 正面下部の様子。末端が階段状になる薄い剥離面が観察できる。この部位は素材表面が緩やかな丸みを帯びており、稜線の剥離が観察されない。また、刃部と下辺の間に薄い剥離面が観察される。
- 3 使用痕光沢なし。
- 4 使用痕光沢なし。

【総合所見】

左側辺の稜線に摩耗が観察される削器である。摩耗は微弱であり、使用によるものか着柄に関連するものなのかは不明である。この箇所には使用で生じた微細剥離は観察されない。また、刃部と思われる下辺は正面側に打面調整と思われる薄く平らな剥離が観察できる。この打面調整は打点間隔や剥離の方向が整っており、押圧剥離によるものである。使用痕光沢は、観察されない。



s=1/1

使用痕光沢の範囲

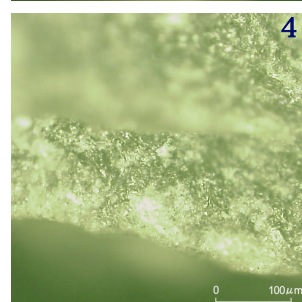
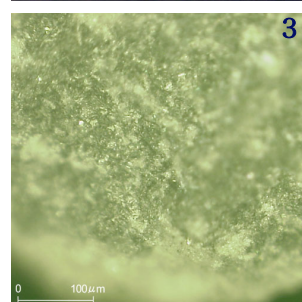
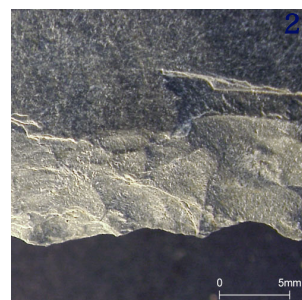
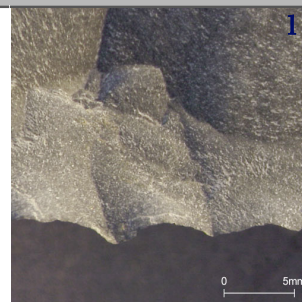
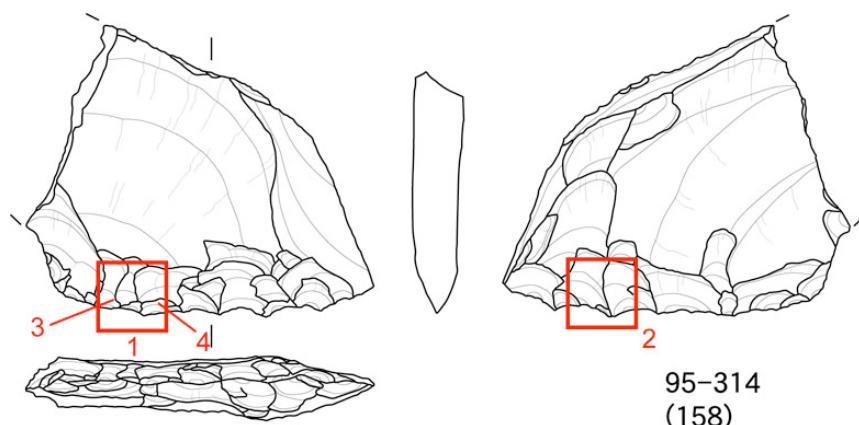
【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 正面側刃部の様子。径の細い工具を使って鋸歯状の縁辺を作り出している。
- 2 裏面側刃部の様子。非常に薄い平らな剥離面が連続している。剥離の厚さは工具を直接押し当ててはなしえない。
- 3 使用痕光沢なし。
- 4 使用痕光沢なし。

【総合所見】

刃部を鋸歯状に作り出した削器で、鋸歯の加工は径の細い工具を急角度に押し当てて行っている。写真2はこの刃部の反対側の面であるが、非常に薄い平らな剥離が連続している。この剥離は非常に薄いので、対象物に石器を押し当てて作られた可能性が高い。この剥離面を打面として表側の鋸歯の剥離が作られているので、打面調整と考えられる。なお、使用による微細剥離、使用痕光沢などは、観察されない。



s=1/1

 使用痕光沢の範囲

【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 裏面側刃部の様子。打点やバルブが明瞭な加工で、硬質の工具を用いた間接打撃によるものである。使用による微細剥離は観察されない。
- 2 正面側刃部の様子。末端が階段状となる薄く平らな剥離面が連続している。このような剥離面は使用で生じる場合が多いが、本資料の場合、極端に剥離の程度が浅く、また、剥離面が連続して、その上に加工が施されている。
- 3 使用痕光沢なし。
- 4 使用痕光沢なし。

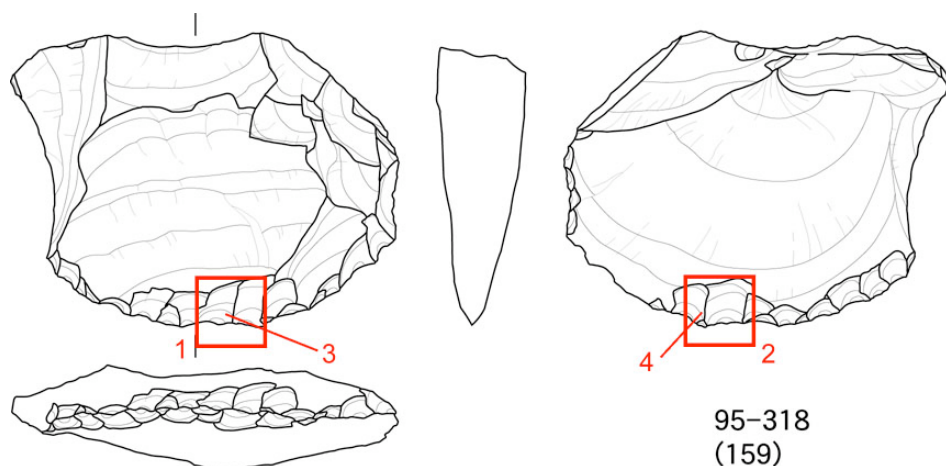
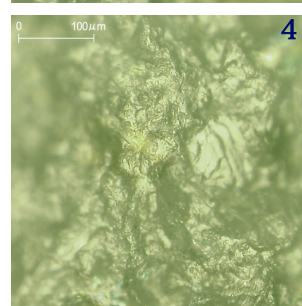
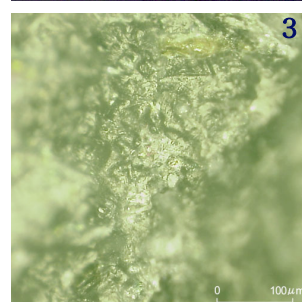
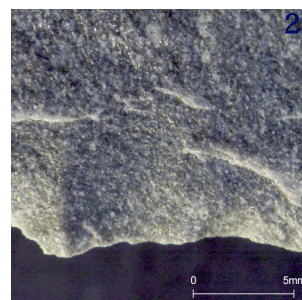
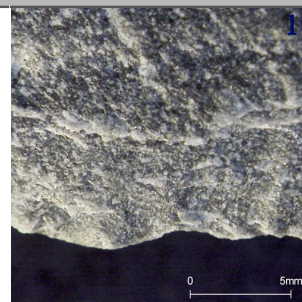
【総合所見】

他の削器と同様に、片面に薄く平らな加工を施し、その面を打面として反対側の面に刃部の加工を行っている。加工はいずれも間接打撃で行われている。なお、刃部に微細剥離、使用痕光沢などは観察されない。

削器

95-318

安山岩

95-318
(159)

s=1/1

使用痕光沢の範囲

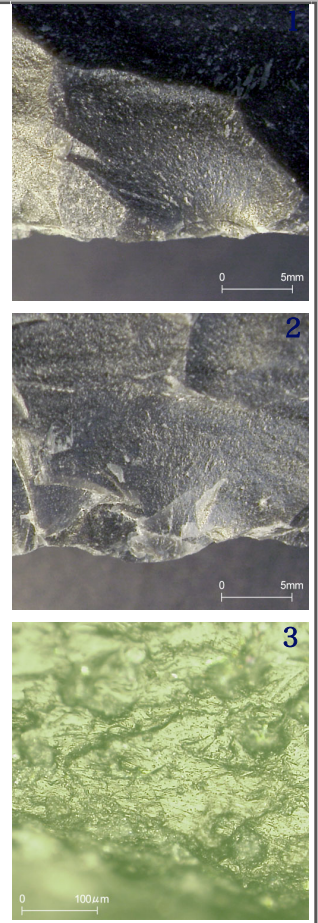
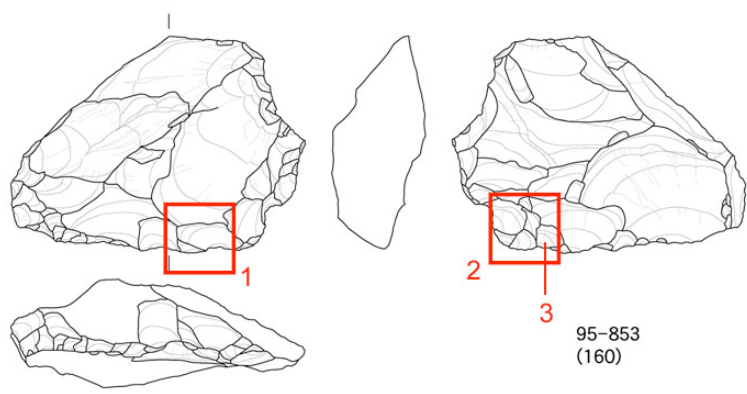
【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 正面側刃部の様子。末端が階段状となるやや薄い剥離面に覆われている。これらの剥離面は打点が明らかなで打点間隔は規則正しく、微細な剥離面が観察できる。
- 2 裏面側刃部の様子。末端が階段状またはフェザーエンドとなる薄い剥離面が観察できる。バルブはさほど発達していない。剥離面は規則正しく、微細な剥離面が観察できる。
- 3 使用痕光沢なし。
- 4 使用痕光沢なし。

【総合所見】

他の削器と同様に、片面に薄く平らな加工を施し、その面を打面として反対側の面に刃部の加工を行っている。加工はいずれも押圧剥離で行われている。なお、刃部に微細剥離、使用痕光沢などは観察されない。



s=2/3

 使用痕光沢の範囲

【使用痕の特徴】 * 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 表面側刃部の様子。打点・コーン・バルブが明瞭な剥離面である。コーンやバルブは発達しており、剥離面同士の間隔が狭い。
- 2 裏面刃部の様子。末端が階段状となる平らな剥離面で覆われている。これらの剥離面は大きさや打点の間隔が不揃いである。打点は上向きで、剥離面は下向きである。
- 3 使用痕光沢なし。
- 4

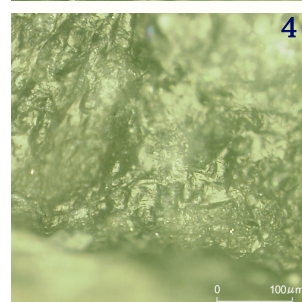
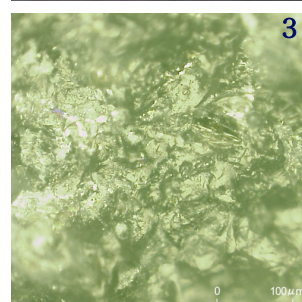
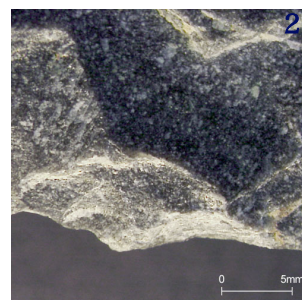
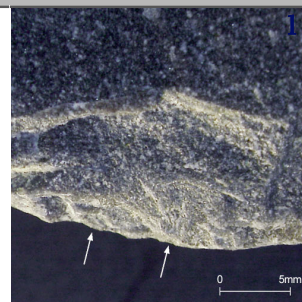
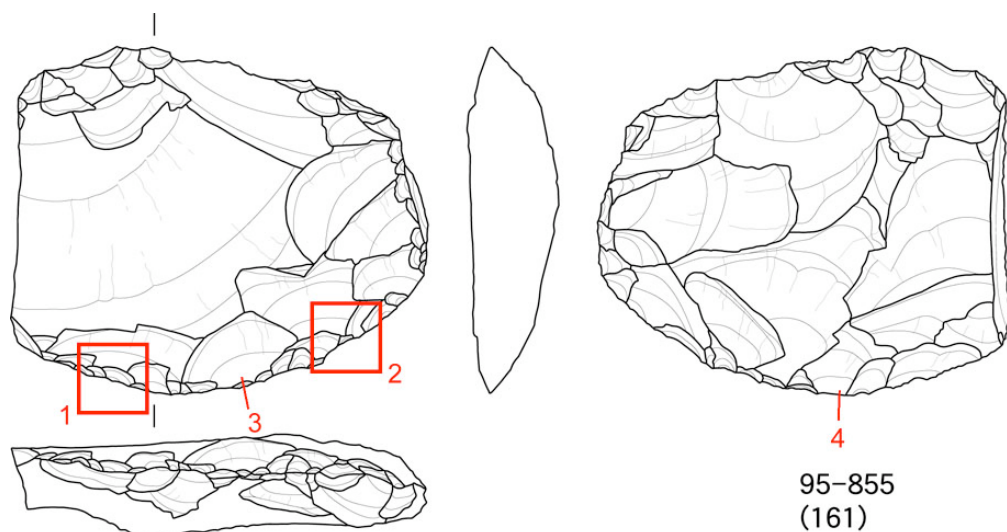
【総合所見】

他の削器と同様に、片面に薄く平らな加工を施し、その面を打面として反対側の面に刃部の加工を行っている。加工は刃部の加工が間接打撃で、打面調整は直接打撃である。八王子遺跡の削器の場合、刃部の加工と打面調整が同じ剥離技術でなされている場合が多いので、本資料は特異である。なお、刃部に微細剥離、使用痕光沢などは観察されない。

削器

95-855

安山岩



s=1/1

 使用痕光沢の範囲

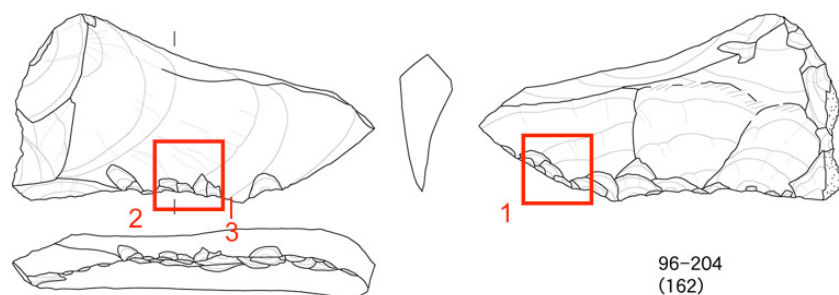
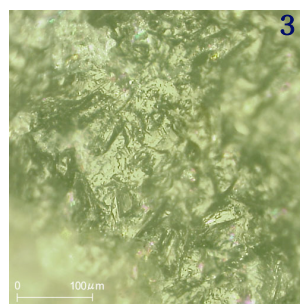
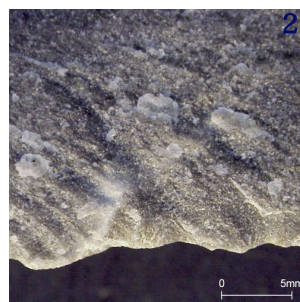
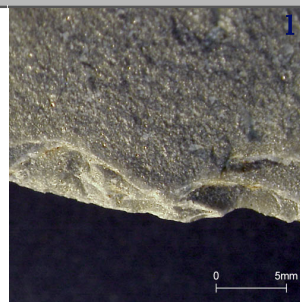
【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 表面側刃部左の様子。末端が階段状になる平らで幅広の剥離面が観察できる。これらの剥離面の打点部分（矢印）が観察できる。前掲の写真と同様の様相が観察できる。画面下右の白い潰れ部分は、裏面側の加工の打点部分の潰れである。その下の平坦な剥離面は、裏面側の加工の打点部分の調整である。
- 2 表面側刃部右側の様子。前掲の写真と同様の様相が観察できる。画面下右の白い潰れ部分は、裏面側の加工の打点部分の潰れである。その下の平坦な剥離面は、裏面側の加工の打点部分の調整である。
- 3 使用痕光沢なし。
- 4 使用痕光沢なし。

【総合所見】

他の削器と同様に、片面に薄く平らな加工を施し、その面を打面として反対側の面に刃部の加工を行っている。加工は打面調整が直接打撃、刃部の加工が間接打撃で行われている。なお、刃部に微細剥離、使用痕光沢などは観察されない。

96-204
(162)

s=2/3

 使用痕光沢の範囲

【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 裏面側の刃部の様子。末端が階段状となる平らで幅広な微細剥離が観察できる。微細剥離は打点の有無や剥離の方向によって異なる。
- 正面側の刃部の様子。末端が階段状かフェザーエンドになる薄く平らな微細剥離が観察できる。剥離面の様相は裏面側とは異なる。
- 使用痕光沢なし。
-

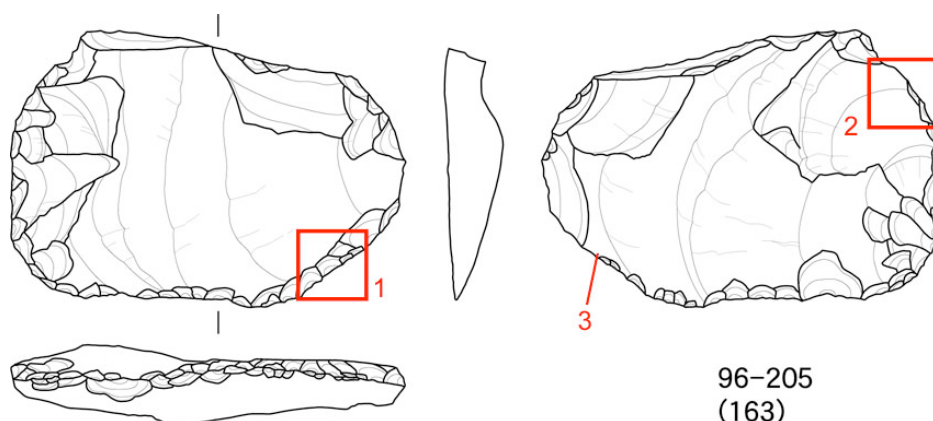
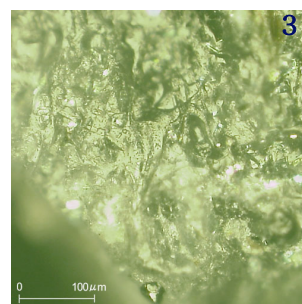
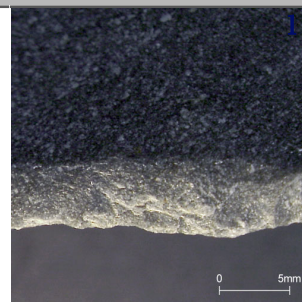
【総合所見】

刃部の表裏両面に同様な微細剥離が観察できる。微細剥離は末端が階段状になる平らな剥離面で、全体的に薄く幅広である。このような様相の微細剥離が刃部両面に生じるには、刃先を立てて前後に動かすソーイングの動作が想定される。刃部に使用痕光沢は観察されない。

削器

96-205

安山岩

96-205
(163)

s=1/1

 使用痕光沢の範囲

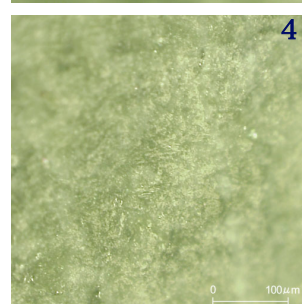
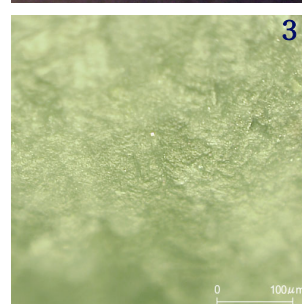
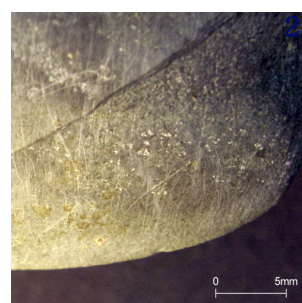
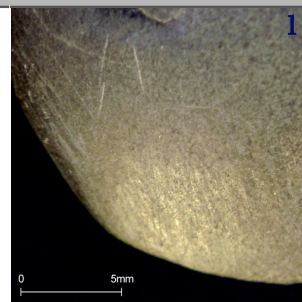
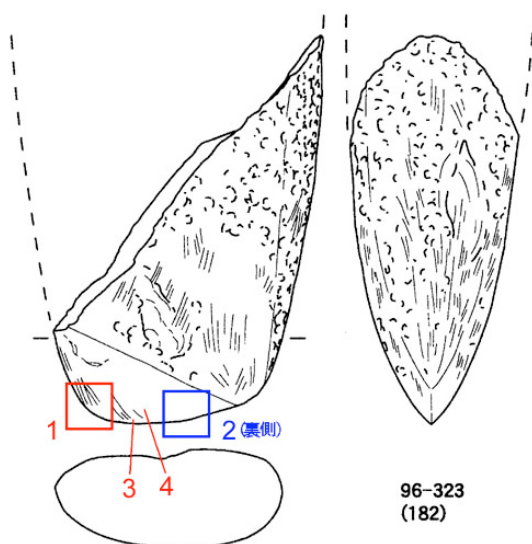
【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 正面側右下刃部の様子。断面に丸みを持つやや急角度の微細剥離が連続している。このような剥離は搔き取りの痕跡と推定される。微細剥離の末端は階段状になる。刃部を磨くことで微細剥離は消失する。
- 2 裏面右上部分の拡大。末端が階段状になる薄い微細剥離と摩耗（矢印部分）が観察できる。摩耗は刃部の縁辺に観察される。
- 3 使用痕光沢なし。
- 4

【総合所見】

搔き取りによる微細剥離が観察される石器である。動作としては刃部をやや立てた搔き取りと推測される。裏面の右上部分にも微細剥離と摩耗が観察できる。微細剥離は打点付近を摩耗によって切られている。刃部に使用痕光沢は観察されない。



s=2/3

 使用痕光沢の範囲

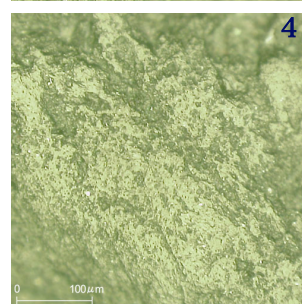
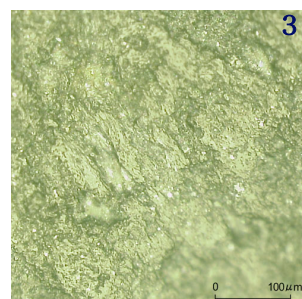
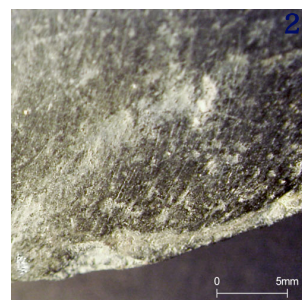
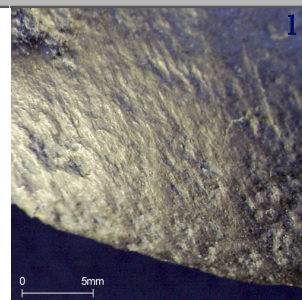
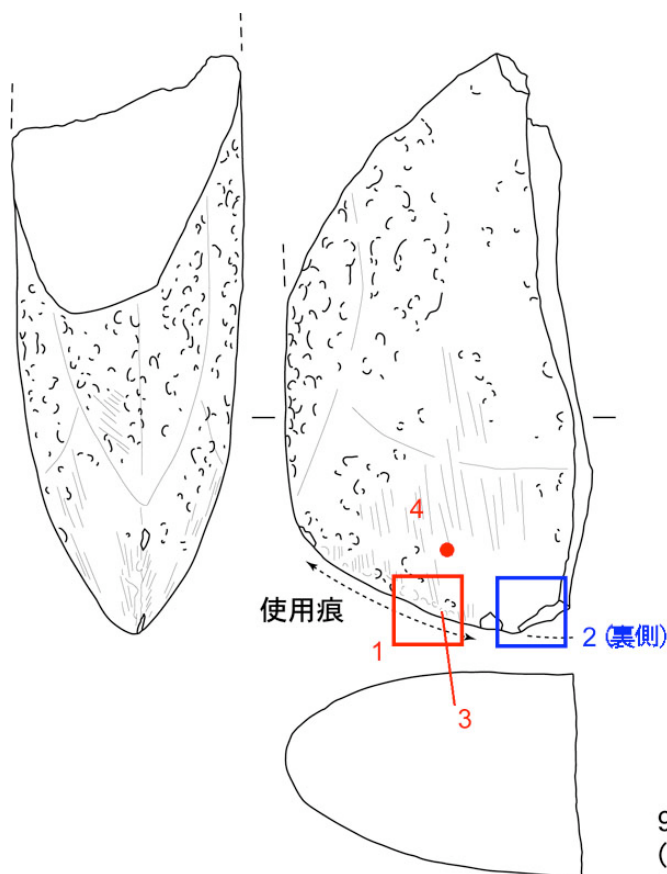
【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 正面側刃部左端の様子。刃部にやや斜行する線條痕が観察される。
- 2 裏面刃部の様子。刃部にやや斜行する細かな線條痕が観察できる。
- 3 不明光沢。
- 4 不明光沢。

【総合所見】

刃部の両面にやや斜行する線條痕が観察される。正面側の刃部の表面は、微弱な摩耗が観察される。刃部に線状痕を伴う不明光沢が観察される。これらの光沢は、使用痕光沢と考えられるが、光沢タイプは不明である。



s=1/1

 使用痕光沢の範囲

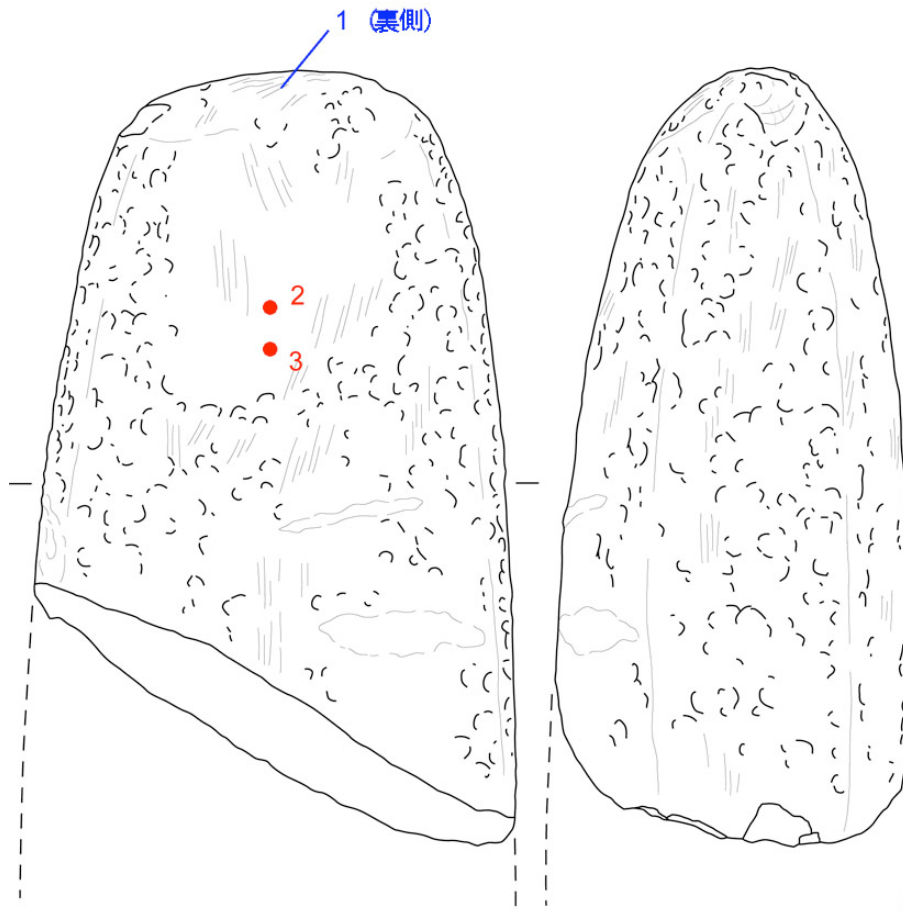
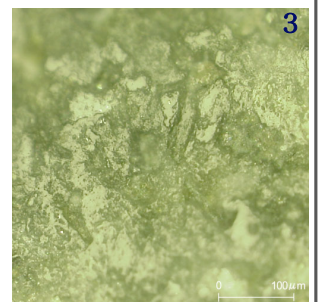
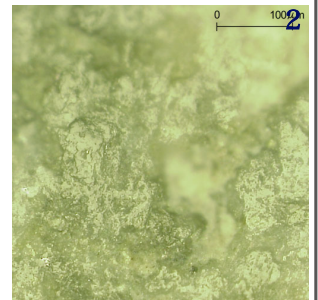
【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 正面側刃部の様子。表面が摩耗している。刃部に斜行する線条痕が観察できる。
- 2 裏面刃部の様子。刃部に斜行する線条痕が観察できる。表面側とは異なり、刃部表面には顕著な摩耗が観察される。
- 3 不明光沢。
- 4 不明光沢。斜め方向に線状痕が走る。

【総合所見】

刃部の両面にやや斜行する線条痕が観察される。正面側の刃部の表面は、顕著な摩耗が観察される。刃部には、線状痕を伴う不明光沢が観察される。これらの不明光沢は使用痕光沢と考えられるが光沢タイプは不明である。

96-326
(184)

s=1/1

 使用痕光沢の範囲

【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

1 頭頂部裏側の様子。摩耗が観察できる。着柄に関する摩耗と思われる。

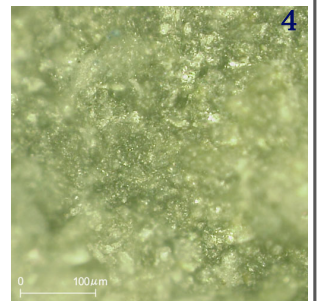
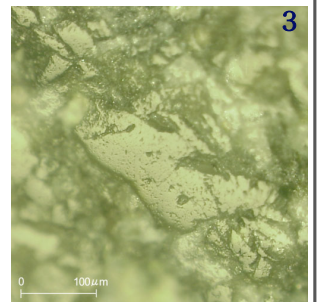
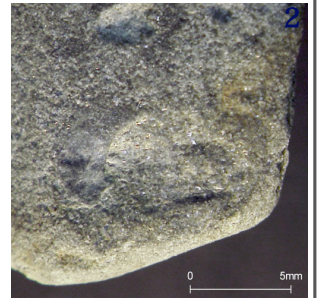
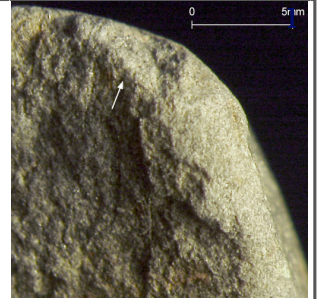
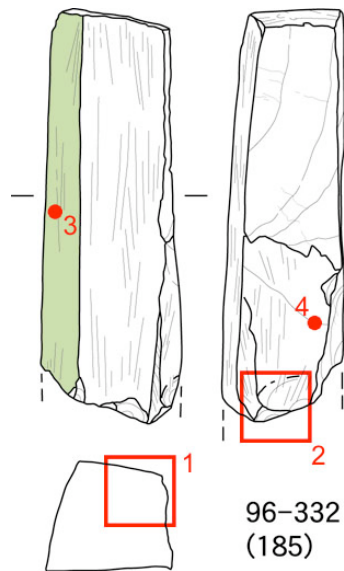
2 Bタイプの使用痕光沢。

3 Bタイプの使用痕光沢。

4

【総合所見】

刃部を欠損する。石器の頭頂部に微弱ながら摩耗の領域が観察された。おそらく、着柄に関する摩耗と考えられる。表面側の摩耗部にBタイプの使用痕光沢が観察される。いわゆる着柄痕である。裏面側にはBタイプの使用痕光沢は観察されない。表面側がより摩耗しやすい装着方法であったことが推測される。



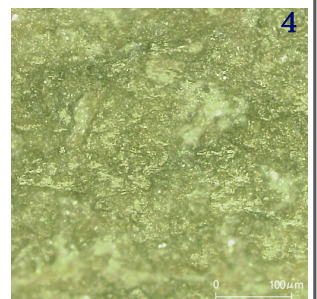
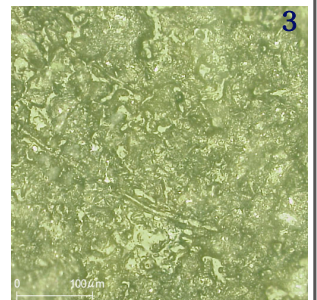
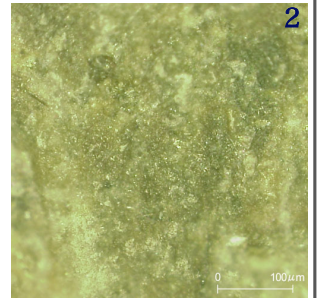
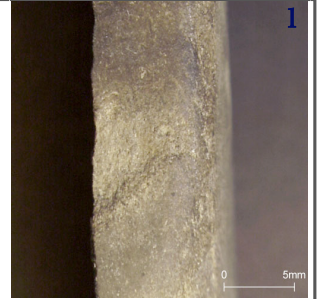
s=1/1

 使用痕光沢の範囲**【使用痕の特徴】** * 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 折れ面を下から見た様子。折れ面の周縁部が激しく摩耗している。矢印の先には敲打痕が見られる。
- 2 右側辺の様子。折れ面部分は全面に摩耗が観察できる。
- 3 Bタイプの使用痕光沢。
- 4 使用痕光沢なし。

【総合所見】

折損した柱状あるいは扁平片刃石斧の破片を再利用した石器で、折損面に敲打と摩耗が観察される。摩耗は折損面だけでなく、側面にも及んでいる。摩耗は敲打に伴うものと思われる。折損面には使用痕光沢は、観察されない。左側面にはBタイプの使用痕光沢が全面に観察され、着柄によるものと考えられる。右側面には、Bタイプの使用痕光沢は観察されない。

96-333
(186)

s=1/1

 使用痕光沢の範囲

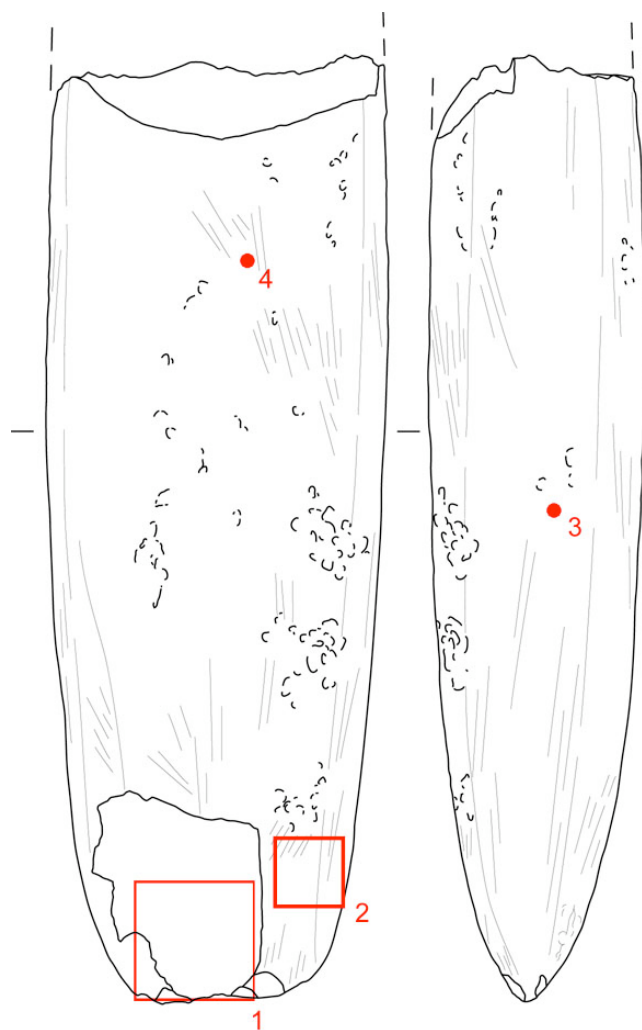
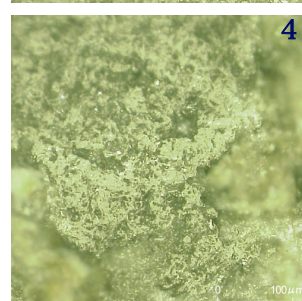
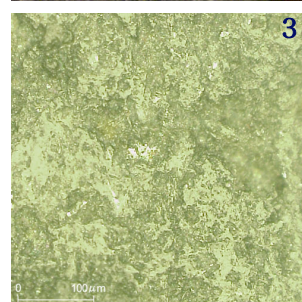
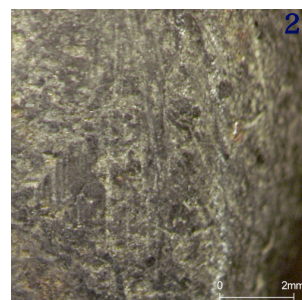
【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 左側辺の様子。側面の突起部分に摩耗が観察できる。摩耗部分は黒色に変色している。
- 2 使用痕光沢なし。
- 3 黒色のタール状付着物。
- 4 不明光沢。

【総合所見】

被熱している。石器の左側面の頭部に近い位置に摩耗が観察され、摩耗部分は黒く変色しており、タール状付着物が観察される。着柄に関するものかもしれない。着柄痕にともなう使用痕光沢などは、明瞭ではない。

96-334
(187)

s=1/1

 使用痕光沢の範囲

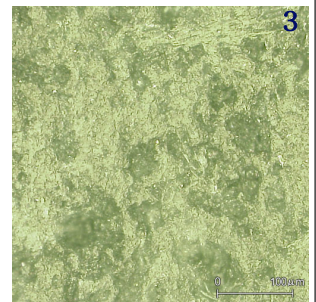
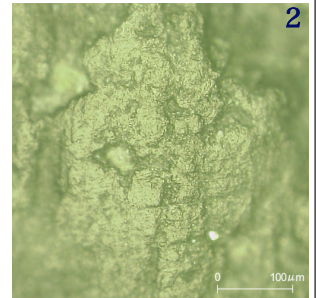
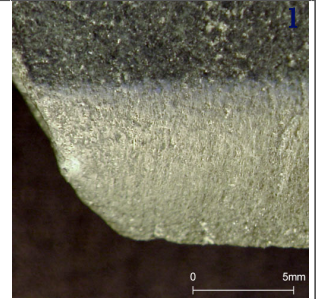
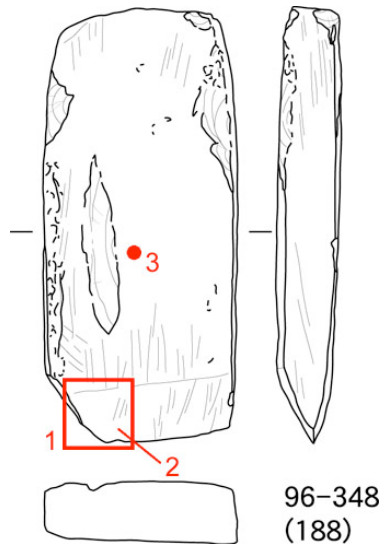
【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 正面側刃部の様子。矢印の先を起点にして大きな破損が見られる。破損面は刃部の曲面に沿って剥がれ、末端が階段状となっている。
- 2 正面刃部内奥の様相。画面で縦方向に走る線条痕は斜行する研磨痕に比べて溝がやや浅いため、使用痕と思われる。
- 3 不明光沢。
- 4 不明光沢。

【総合所見】

刃部に大きな破損が入る磨製石斧で、破損は刃部表面の丸みに沿って細長く剥がれ、末端は階段状となっている。このような破損は磨製石斧ではごくふつうに観察されるもので、どちらの面が対象物に接触していたかを知る手がかりとなる。破損は対象物とあまり接していない面に生じるので、写真1の面がそれにあたる。ほぼ石器全面に写真3と4のような不明光沢が観察される。その成因は不明である。



s=1/1

 使用痕光沢の範囲

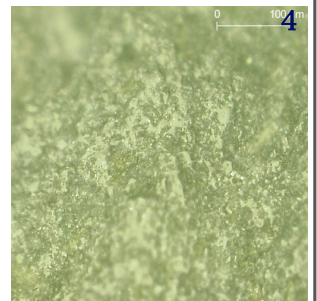
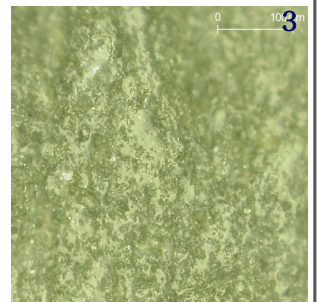
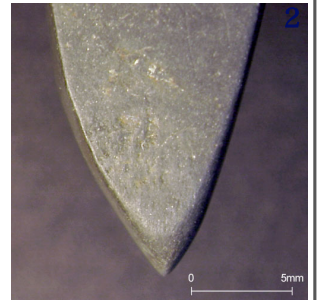
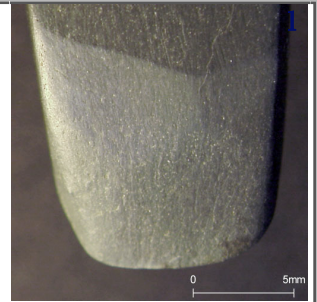
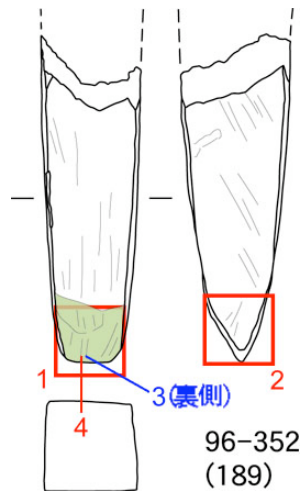
【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 正面刃部の様子。刃部には摩耗と刃部に直交する線条痕が観察できる。摩耗は刃部と身部の境の鑄の箇所が著し
- 2 不明光沢。縦方向に線状痕が観察される。
- 3 不明光沢。
- 4

【総合所見】

刃部に顕著な摩耗と線条痕が観察される。刃部の縦断面形は片刃を示しており、写真1の様相から、こちらの面が対象物と多く接触していたと考えられる。刃部には使用による線状痕が観察され、使用痕光沢は、不明光沢が観察される。着柄痕にともなう使用痕光沢は写真3のような不明光沢がほぼ全面にみられる。



s=1/1

 使用痕光沢の範囲

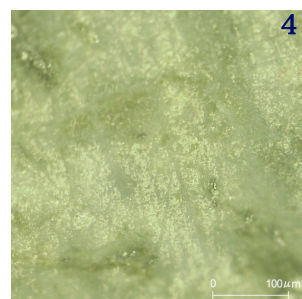
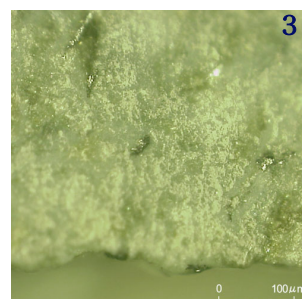
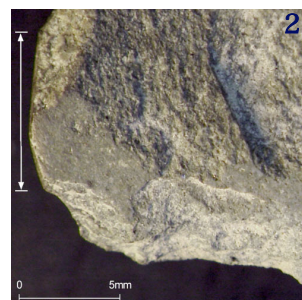
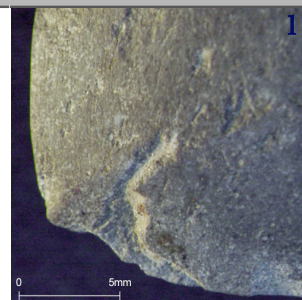
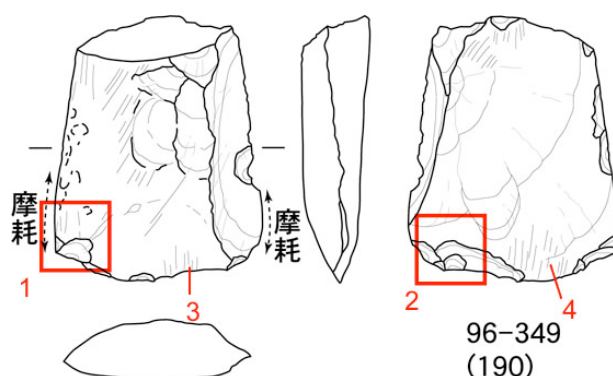
【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 表面側刃部の様子。刃部縁辺には刃部に直交する線條痕が観察できる。また、刃部の表面にはかすかな摩耗が認められる。
- 2 右側辺の様子。刃部先端部の摩耗が顕著であり、かすかな線條痕も観察できる。また、表裏面と交わる稜線にも摩耗が認められる。
- 3 Bタイプの使用痕光沢。
- 4 Bタイプの使用痕光沢。

【総合所見】

角柱状にしっかりと面取りがなされた磨製石斧で、刃部の縦断面形は片刃となる。刃部先端部の摩耗が顕著で、面取りによってできた稜線も激しく摩耗している。刃部の表裏面にBタイプの使用痕光沢が観察される。推定される被加工物は、木である可能性が高い。刃部には刃部に直交する線状痕が観察される。



s=1/1

 使用痕光沢の範囲

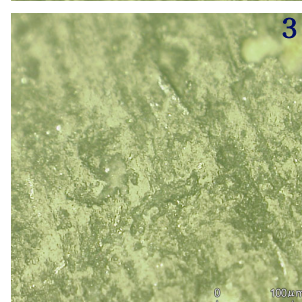
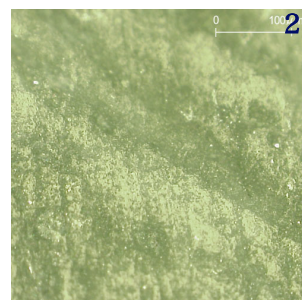
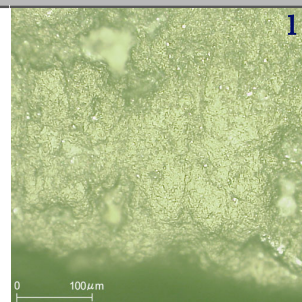
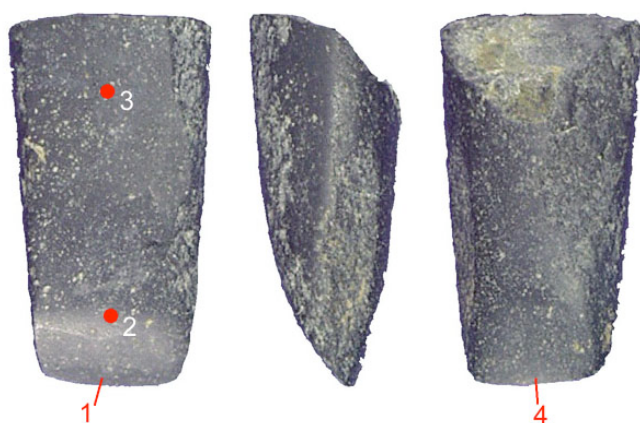
【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 正面刃部左端の様子。末端が階段状となる平らな刃こぼれと、それを切る摩耗と線条痕が観察できる。
- 2 裏面刃部の様子。通常角度で生じたやや大きめの刃こぼれが観察できる。刃こぼれは刃部と垂直方向に生じており、裏面側の線条痕が刃部と垂直方向に生じている。また、正面側の刃部の範囲には磨耗と摩耗が観察できる。
- 3 不明光沢。刃部に直交する線状痕が観察される。
- 4 不明光沢。刃部にほぼ直交する線状痕が観察される。

【総合所見】

刃部の縦断面形が片刃を示す磨製石斧で、丸みを持った面（写真1）の側に顕著な摩耗と線条痕が観察できる。反対側の平らな面（写真2）には通常角度で生じた刃こぼれが観察できる。これらの使用痕は、写真1の丸みを持った面が対象物とより多く接していたことを示すものである。刃部には、刃部に直交する線状痕が観察されるが、線状痕に伴う光沢は不明光沢である。刃部以外の面にも同じような不明光沢が観察される。



s=1/1

 使用痕光沢の範囲

【使用痕の特徴】

* 使用痕画像をクリックすると拡大表示します

- 1 不明光沢。
磨製石斧の刃部破片である。刃部には使用による線状痕が明瞭に観察されるが、使用痕光沢については、現在光沢分類されているものには当てはまらない不明光沢である。
- 2 不明光沢。
磨製石斧の刃部破片である。刃部には使用による線状痕が明瞭に観察されるが、使用痕光沢については、現在光沢分類されているものには当てはまらない不明光沢である。
- 3 Bタイプの使用痕光沢である。この光沢が観察される部位から着柄痕と考えられる。
- 4 不明光沢である。
磨製石斧の刃部破片である。刃部には使用による線状痕が明瞭に観察されるが、使用痕光沢については、現在光沢分類されているものには当てはまらない不明光沢である。

【総合所見】

柱状片刃石斧の刃部破片である。刃部には使用による線状痕が明瞭に観察されるが、使用痕光沢については、現在光沢分類されているものには当てはまらない不明光沢である。

表面側には写真3のようなBタイプが見られる着柄痕が観察される。